06 **アジアタイムズのウクライナ関連報道**

アジアタイムズがまとめてウクライナ関連の報道を行っている。

１． US intelligence says Ukraine’s offensive a failure
by STEPHEN BRYEN
AUGUST 19, 2023

２． Multiple failures hounding Ukraine’s counteroffensive
By DANIEL WILLIAMS
AUGUST 19, 2023

まとめて、内容を要約紹介しておく。なお訳出にあたって、Google の無料翻訳機能を活用し、その出力結果を一部修正したが、速報のための仮訳として理解いただきたい。（SS）

1.US intelligence says Ukraine’s offensive a failure
https://asiatimes.com/2023/08/us-intelligence-says-ukraines-offensive-a-failure/

米情報機関、ウクライナの反転攻勢は失敗したと発表

＊ メリトポリの闘い

ウクライナの攻撃は、メリトポリ市を奪還するという事にあった。米国の情報機関は、ウクライナが軍が目標に到達できず、失敗に終わったとしている。
『ワシントン・ポスト』紙の報道によれば、ウクライナはウクライナ南部を奪還し、クリミア半島をロシア軍から切り離そうとした。

南部攻撃と並行して、ウクライナはロシアとクリミアを結ぶケルチ海峡の橋を攻撃している。これらの攻撃には米英の協力を得ている。しかし橋の車道は損傷したものの、まだ使用不能には陥っていない。

実際の戦闘地域は、メリトポリから 80.5 キロ以上離れたロボティネ村周辺である。
ウクライナ軍は、ウクライナ第 82 空挺部隊を含む最高の訓練を受けた戦略予備軍を投入した。
西側の装備もフル稼働している。英国のチャレンジャーII 戦車、マーダー歩兵戦闘車、米国のストライカー8 輪戦車、ブラッドレー歩兵戦闘車、そして米国製の重装備輸送車（MRAP）である。
それらの戦闘車の目的は、ロシアの防衛を突破し、メリトポリまで競争することだった。

ウクライナ側は一時的に戦線を進めたものの、人的にも物的にも非常に大きな犠牲を払っている。ほとんどの場合、ロシア軍は攻撃兵力を戦術的に後退させている。
「チャレンジャー戦車はロシア軍を打ち負かすだろう」という話はネット上に溢れかえっている。しかしそんなことは起きていない。

枯渇するウクライナ兵力

ウクライナ軍は予備役まで投入して必死の攻撃をかけている。もし予備役が大損害をこうむるような事態になれば、もはや効果的な戦闘体系は維持できなくなる。そうなれば、ウクライナの戦争継続計画は破滅しかねない。
ウクライナには戦略的予備軍に代わる人材がいない。徴兵される可能性のある教育を受けた若者のほとんどは、賄賂を贈って徴兵を免れるか、国外に去った。
ゼレンスキーは今週、ウクライナの軍隊募集担当者を全員解雇した。ゼレンスキーは、どんな手段を使ってでも、国内で徴兵活動を進めるよう軍に号令をかけている。

現在、40 歳以上の男性を戦争場面に引き入れようとする話が出ている。しかしすでに現場で目にする兵士の多くは、かなり高齢のように見える。
仮にウクライナが兵士をかき集めたとしても、訓練を受けていない彼らは軍にとってただの重荷だ。底辺の兵士をかき集めたところで、集まってくるのは戦いたくないと思っている頼りない連中ばかりだ。

それはウクライナの将校や下士官にとっても致命的な問題である。下士官は新兵を戦力に育て上げるだけでなく、彼らに「肉挽き機」に足を踏み入れ、命を懸けるよう説得しなければならない。すでに今でも、部隊がまるごと、自殺行為と見なした戦闘への参加を拒否した例がある。

ロシアの戦略は、ほとんどすべての分野で積極的な防衛に留まっている。唯一の例外がハリコフ州である。ここではロシア軍は急速に前進しており、ウクライナが北東部の部隊への弾薬や物資の輸送に必要とする鉄道の要衝、クピャンスクの町を間もなく攻撃開始する。
多くのオブザーバーは、クピャンスクは進撃が始まれば 1 週間ほどで陥落すると見ている。

ロシアは、今のところ自軍からの攻撃は開始していないが、その準備はしているという。ロシアは北東部に約 10 万人の兵力を集めており、来るべき攻勢に投入される可能性がある。装備の輸送隊も目撃され、撮影されている。明確でないのは、ロシアがどこに向かっているのかということだ。ロシアはウクライナ第 2 の都市ハリコフを目指すという見方もある。しかし、ロシア軍には他の選択肢もある。ウクライナの攻勢が一段落すれば、北と南からウクライナの主力軍を罠にはめようとする可能性もある。これはウクライナを危険にさらし、キエフにとって存立にかかわる危機事態の引き金になりかねない。

ロシア側の生殺し作戦

米情報機関の公開報告書は、あまり先の見通しを伝えていない。しかし、じつはもっと厳しい機密評価もあるようだ。

情報機関はホワイトハウスと国家安全保障会議に何を伝えているのだろうか？ そして彼らは注意を惹きつけることができるのだろうか？

議会の「親ウクライナ議員連盟」の共同議長であるアンディ・ハリス下院議員（R-MD）は、ウクライナ戦争には勝てないという結論に達している。他の議員と同様、彼は膠着状態に陥るだろう話しているが、ロシアは紛争に決着をつけるまで戦闘を止めることはないだろうと、内心では考えている。
ウクライナとは逆に、ロシアには人手不足はなく、戦争産業は現在 24 時間 365 日稼働しており、戦争に必要な装備品を生産している。熟練労働者の深刻な不足とサプライチェーンに大きな問題を抱えているアメリカやヨーロッパでは、このようなことは考えられない。
レイセオン（RTX 社）のようなアメリカの主要防衛企業さえも、その生産が中国からの供給に大きく依存していることを認めている。
中国がそのパイプラインを遮断するのも、そう遠くはないだろう。

バイデンはウクライナにさらに 206 億米ドルを供与するよう望んでいるが、それには議会の同意が不可欠だ。しかし議会が負けるような戦争に大金をつぎ込む提案に賛成するとは思えない。
米政権はバイデンが再選されるまで戦争を長引かせたいと考えている。焚き火を燃やし続けるために、「膠着状態」という幻想を広めているのだ。
ワシントンの誰も、ロシアと話し合い、紛争を解決しようとは微塵も考えていないようだ。しかし、風は吹き始め、やがて雨が降り始めるだろう。

Stephen Bryen is a senior fellow at the Center for Security Policy and the Yorktown Institute. This article was originally published on Weapons and Strategy, his Substack. Asia Times is republishing the article with permission.

２．ウクライナの反攻作戦は災厄続き

Multiple failures hounding Ukraine’s counteroffensive

https://asiatimes.com/2023/08/multiple-failures-hounding-ukraines-counteroffensive/

ウクライナの反攻作戦は災厄続き

By DANIEL WILLIAMS

前線を訪れた人々は、膠着状態が続いている理由を複数挙げている。
まず第一に、ウクライナ東部と南部の 600 マイルに及ぶ前線に沿ってロシアが広範な地雷原を敷設している。これが、ウクライナ軍が遅々として進まない最大の理由となっている。
しかし、地雷原は戦場停滞の原因の一つに過ぎないと専門家は指摘する。
ウクライナ側には戦術的欠陥があり、前進をもたらすような高度な攻撃を仕掛けることができないのだ。

ロシア軍と同様、ウクライナ軍も、時間をかけて敵の守備力を消耗させるよう設計された打撃的な大砲射撃に後退している。
カタツムリのようなノソノソとした反攻には、初期に見せたロシア軍の弱点への一種の侮りや傲慢さも一役買っている。開戦当初、ロシアが主要都市を占領するのに失敗し、その後モスクワ軍は戦術的撤退を行った。そのことで、ウクライナの再進撃への期待が過剰に高まったのかもしれない。
しかし、今はロシア軍は塹壕を掘り進めて待機している。そんなところでウクライナの破竹の進撃など起こるはずがない。

ウクライナ側は 10 月下旬、冬が到来する前に大きな勝利を収めたいと考えていた。しかし、その可能性は低くなった。前線部隊は、前進するための努力を「木から木へ」と表現している。「消耗戦」という言葉が、この戦争を表現するのに恰好なレッテルとして登場しつつある。

南部攻勢の見通し

米国のシンクタンク、戦略国際問題研究センターの主要研究者であるアンソニー・コーデスマンはこう書いている。

「最も可能性の高い結末は、明確な結果も期限もない消耗戦である。それは、両陣営が戦線全体に沿ってますます攻勢を強めながら、消耗度の高い、表面上は静かな戦いを果てしなく続ける戦争である」

ジェフリー・サックスはコロンビア大学教授で政治活動家。左翼の立場からジョー・バイデン米大統領を批判している。
「ウクライナは破壊されつつある」　サックスはテレビインタビューでそう語った。なぜなら戦争を止めないからだ。
彼は、ワシントンには戦争を継続させなければならない動機があると指摘する。「もはや戦略などない。最悪の場合は戦闘的な空語を並べ立てるだけだ」
バイデンは 2024 年選挙で再選を目指している。ウクライナが敗北してそれが争点になるのは都合が悪いからだ。

後ずさりをはじめた西側諸国

ロシア軍がまだウクライナに駐留しているのに、キエフを支持する西側諸国政府は、ウクライナへの支援を公言しながらも、一方では紛争の交渉による解決を検討し始めている。

ゼレンスキー大統領は依然声を張り上げている。「ロシアはまずウクライナ領内から退去しなければならない」　一方、クレバ外相は、ウクライナにとって「困難な」外交の秋になると予測している。押し寄せる和平交渉の要求を退けるためだ。
「このままでは問題で、交渉が必要だという声が、世界のさまざまな国で聞こえ始めている。こうした声はますます大きくなっている」とクレバはウクライナの通信社に語った。

8 月 15 日には、NATO の高官が、ウクライナは交渉すべきだという考えを公然と口にした。NATO 事務総長補佐官のスティアン・イェンセン氏は語っている。

「ウクライナがいくつかの領土を放棄する代わりに、NATO 加盟を得るという解決策もあり得ると思う。西側の外交官たちはすでに、戦争終了後のウクライナの地位について話し合っている」
ウクライナ当局はこの発言に猛反発した。
「占領地を取り戻すという大義のため、ウクライナ軍は日々犠牲者を出している」
ジェンセンは直ちに自分の言葉を撤回し、「それは間違いでした」と謝罪した。

バイデンはウクライナのロシアとの戦いを "必要な限り "支援すると公言している。しかし、彼の政権内でも曖昧さが表面化することがある。
昨年の冬、ウクライナ軍が前進し、ロシア軍が後退しているように見えたとき、マーク・ミリー将軍はこう示唆した。
「君なら、交渉は、自分たちが強く、相手が弱いときに行いたいものだ、と思わないかね。軍事的勝利はおそらく、リアルな意味で、達成不可能である。そういう認識が相互に必要だ」
ミレーもその後ウクライナの不満に直面し、口頭で提案を撤回した。

ウクライナ側の“計算違い”の数々

いずれにせよ、ミリーが述べたような幸せな「瞬間」は過ぎた。ウクライナ軍は、長い前線の数カ所でわずかな前進しかしていない。2 ヶ月の「攻勢」で獲得した距離は、推定で 10 マイルに過ぎない。
ザポリージャ原発の南東にあるオリヒフの町周辺では約 1500 ヤード、東にあるフレイポールとヴェリカ・ノヴォシルカ周辺はそれよりも少ない。冬から春にかけての激しい戦闘でロシアの傭兵に奪われた町バフムートの近くでは、ウクライナ軍が取り戻したのは数百ヤードの高地だけだ。

「複合兵装作戦」と呼ばれる戦闘スタイルがある。この作戦では異なる戦闘部門が同時攻撃を同期させる。たとえば、戦車が敵の陣地に発砲したり、歩兵の前進を守るために誘導ミサイルを発射したりする。

英国の研究機関、国際戦略研究所のコンサルティング研究員フランツ＝ステファン・ガディはこう指摘する。この戦術にはウクライナ側が習得していないレベルの調整が必要だ。ウクライナはこの作戦を実施できないため、ロシアの防衛網を突破するのは難しい。

ガディたちは最近、ザポリツィヤ近郊のウクライナの前線で数日間を過ごした。彼は最前線の兵士たちが直面している状況を厳しく描いている。
「念入りな情報活動をやったはずなのに、どういうわけか、同盟国は対地雷装備を装備させなかった。本当はそれが現地での最大の突破口であった。地雷で外傷を負った兵士のあいだには、巨大な不信感を意味する共通のテーマがある。自分たちの苦しみを他人が理解できるはずがないということである」

ロシア軍の遅滞攻撃戦略

当初、モスクワも西側当局者も、この戦争は数日で終わると予測していた。しかしロシアが早期に大胆な転進を実施して以来、戦線は膠着した。ロシア軍前線は、米国と NATO の同盟国がウクライナに提供した比較的高度な兵器に身を晒すこととなり、それから身を守るために奔走してきた。

米国が納入した HIMAR 軽多連装ロケットランチャーは、ウクライナに最大 72 キロ離れた標的を攻撃する能力を与えた。しかし、2023 年の冬の終わりまでに、ロシアは HIMAR の誘導システムを妨害する方法を編み出し、発射弾の効果を大幅に低下させた。
ガディは言う。
「昨夏の HIMAR の効果はもはや確実に終わった。それどころかロシアの誘導システム妨害能力は、より先進的な米国製兵器の提供の妨げになるかもしれない。他の長距離精密誘導弾について考えるときにも、そのことを念頭に置くべきだと思う。ロシアは遅かれ早かれ、最新鋭兵器に対しても対抗策を見つけるだろう」

兵器の出し惜しみに動くアメリカ

実際、バイデン政権は最近、ウクライナ軍を支援するためにより洗練された武器を送る代わりに、“原始的な” 数百発のクラスター爆弾を提供した、 クラスター爆弾とは、砲弾から発射される無誘導兵器の群れで、広範囲に散布される。インドシナ戦争で頻用された、人道性にも問題のある時代遅れの兵器だ。

一部の観測筋は、次のような問題があると指摘している。洗練されていない戦術、ロシアの防衛力向上、地雷原の効果を予測できなかったこと、迅速な突破口への過度の期待など。
つまり、総合的に見て、ロシアを屈服させるという希望は空想にすぎないということだ。

これらはすべて、ロシア、とりわけプーチン大統領が相次ぐ災難に直面する中で起こった。すなわち、戦場での失敗、トップ将官の粛清、反体制派への迫害に続く国内での時折の反発の爆発、そしてウクライナで何カ月も戦ったワグネル・グループの傭兵たちの明らかな反乱などである。
初期の混乱を経て、ロシアは、ウクライナのインフラと士気にダメージを与えるため、ロケット弾や無人機による攻撃をウクライナ内陸部に浴びせるようになった。

「南部戦線異常なし」

では、どちらの側にも地上での突破口はなさそうだとしたら、次はどうするのか？
それはおそらく、第一次世界大戦のような塹壕戦ではないだろうか。

米国の右派シンクタンク、ランド・コーポレーションの政治学者、ラファエル・コーエンはいう。
「最大の戦略的問題は、前線が停滞し、最終的に戦争が “凍った紛争” になるかどうかだ」と書いている。

「その答えは、最終的には東西の力関係だ。西側の軍事援助が優勢になるか、それとも現在進行中のロシアの動員力が優勢になるかだろう」